

無間の剣製

全智一皆

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現実とは、決して甘くはない。

転生して、力を得ても、その力を十全に振るう事が出来るかと問われれば、それは否だ。

それが他人の力なら、尚の事。

彼は苦痛を味わいながら、しかし少しずつ、贗物へと近づいていく。

目次

序章 「現実直視」	1
第一話 「悪魔の駒」	8
第二話 「投影開始」	14
第三話 「歪な憧憬」	21
第四話 「悪魔の世界」	25
第五話 「力の使い方」	28
第六話 「覚悟と決意」	33
第七話 「唯一つの試練」	38
第八話 「天から墜ちた者」	42

序章 「現実直視」

■ ■ ■
現実には甘くない。そんな言葉を、誰もが口にする。

だが、実際その言葉は実に的確かつ事実であり、この世界における誰もを当てはめる例外を生まぬ言葉である。

そう、例外など無い。この世界に存在する数多の生命、その中でも最も数が多い「人類」にすら、その言葉は当てはまる。

例えどれほどの天才であろうとも、たかだが天才程度で生きていける程に世界は、現実には甘くないのだ。

仕事が出来る人間が居たとすれば、その人間は確かに会社で重宝されることだろう。

だが同時に、多くの者から妬まれる事にもなってしまう。

性格が良い人間が居たとすれば、その人間は確かに多くの他者から良く言われるだろう。

だが同時に、多くの者から騙されてしまう事にもなってしまう。

長所には短所が伴い、またその逆で短所に長所が伴うことも勿論有る。

そういった点を含めて、現実とは甘いものではない。世界は簡単に生きられるものではない。

!! どんな長所を持っていようと苦労はするものであり、それが短所に変わってしまうこともある。それが現実というものだ。

!!! 先も言ったように、それには一切の例外など無い。

!!! 例えそれが——神から授けられた才能、特典であったとしても、

!!! だ。その力が自分ではない他者の物であったならば、その力を選んだ当

!!! 事者は決して妄想通りになど——ならないのだ。

!!! だ。 |

!!! だ。 |

!!! だ。 |

!!! だ。 |

!!! だ。 |

!!! だ。 |

!!! だ。 |

劈く悲鳴を上げながら、少年は死んだ方がマシだと思ってしまう程の激痛が走る頭を抱えていた。

少年は、所謂「転生者」という枠に当てはまる存在だった。

幸か不幸か死んでしまい、それが神の不手際であったが故に一つの特典を選び転生する権利を与えられた。

特典を選び、喜々としながら、少年は異世界に——もとい、現実世界に有る作品の一つ「ハイスクールD×D」に転生を成した。

それから、特典を試しに使い——その結果、得たのは地獄の如き苦痛だった。

「ああ、あああ——!!!!!!」

まるで、プレスで押し潰されているのではないかと思わざるをえない頭痛に、少年は絶叫に続いて大きな呻きを上げる。

副作用？ いや、違う——これは、ただの拒絶反応だ。

少年が選んだ特典——それは、彼が生前から好んでいた「エミヤ」というキャラクターの力だ。

英霊エミヤ——それは『Fate』という作品に登場するキャラクターの一人であり、それでいて主人公でもあった。

人間のふりをしたロボットとも例えられた筋金入りの自己犠牲精神の持ち主であった「魔術使い」の少年「衛宮士郎」、その未来の姿こそが、英霊エミヤと呼ばれる存在である。

彼が選んだ特典は、その『エミヤの力』——即ち、英霊エミヤに連なる全ての力である。

『剣』の起源、投影魔術といった「エミヤ」というキャラクターの力の諸々を、少年は選び、手にしたのだ。

深く考えぬ皆々であれば、すぐに使えるものだ、と考えるだろう。だが、真剣に考えてみればどうか。

その力は、決して少年のものなどではない。

投影魔術を用いて、数多の剣を投影する事が出来るのは、衛宮士郎と英霊エミヤの起源が『剣』であるが故のものであり、その過程には『全て遠き理想郷』という鞘が必要だった。

しかし、少年は鞘など持っておらず、更には最初から起源という概

として生きていけば、こんな地獄の如き苦痛を味わう事も無かったのだ。

鋼が、内側から肉を抉って頭になる。

剣。その力によつて精製され、暴走し、男の内側から男自身を串刺しにしようとする意思有る反動力。

背中から、剣が突き出る。

両腕から、剣が生え出す。

ボタボタと、背中や腕から流れていく黒い血液が地面を彩る。

意識が揺らぐ。

ばたりと、体が倒れる。

感覚は無い。

痛みも無い。

自分が倒れてしまったという感覚すら、剣が突き出た激痛すら、彼は得られなくなっていた。

既に、失うものは無くなっていた。

何もかもが、力を手に入れた時から失われていた。そうなる事が、定められていた。

後悔も出来ぬまま、静かに瞼を下ろす。

眠ることも出来ない。

自分はただ、剣と化して朽ち果てるだけなのだ。

微かな意識が、そんなどうしようもない現実を理解する。

苦痛は無く、快感も無く。

ただ、ただ愚かに、そして哀れに。

ハリネズミのように剣に飲み込まれて、朽ち果てる。

恨むべきは、神ではなく——馬鹿な選択をした、自分自身だ。嫌だ。

愚かな自分、馬鹿な自分を恨みながら。

こんなの嫌だ。

自業自得で死ぬ選択をしたのは自分自身なのだ。
生きたい。

抗う意識も無い。
まだ、生きていたい。

え

瞬間。

檻が消えた。

自分を苦しめた剣の檻、枷、その全てが消えた。

体が軽い。

心も軽い。

痛みが無い。

自分は死んだのだろうか。そう思ってしまう。

だが、体は動かせる。意識も保っている。

「体は剣で出来ている。」

世界は、荒れていた。

目に映る空は暗く、足をつける地面は冷たい。

花は枯れ果てている。

そこら中に、何かの欠片が落ちている。

「血潮は鉄で、心は硝子。」

独唱が脳に響く。

——懐かしい。

初めて聞いた筈なのに。

何故か、その独初の一節が、とても懐かしく感じる。

「幾度の戦場を越えて不敗。」

刺さる。

冷たい地面に、一本の剣が突き刺さる。

何故、剣が突き刺さったのだろう。

そう考えた時には、既に別の剣が突き刺さっていた。

「たった一度の敗走は無く、ただの一度も理解されない。」

視界に、赤が広がった。

ひらひらと、風に吹かれる赤い外套。

これだ。

これを、探していた気がする。

理由は全く分からない。

けれど、これを探していたのだと、理解した。

「彼の者は常に独り、剣の丘で勝利に酔う。」

剣が落ちてくる。

暗い空から、幾万もの剣が地面へと降り注ぐ。

しかし。だが、しかし。

そのどれもが自分には当たらない。

掠ることもなく、まるで剣自体が直撃を避けるように、地面へと向かって行く。

「故に、生涯に意味はなく。」

取られる。

はためいた赤い外套を、肌の焼けた白髪の人に掴み取られる。

だが、不快は無い。

寧ろ、その真逆。

その男が、赤い外套を取ってくれた事に感謝の心すら湧いて出た。見覚えがある。

初対面であるにも関わらず、その男には見覚えが有る。

「その体は、きっと剣で出来ていた。」

独白が終わる。

男が此方へと体を向ける。

顔は険しく、だが敵意の心は無く。

「此処から先は、地獄だぞ。」

忠告が胸に突き刺さる。

知って、いる。

次々と、記憶が鮮明に溢れる。

男が辿った道。

男が至った先。

その過去と未来、両方の記憶が波の如く迫ってくる。

「

戸惑う。

記憶の波、力の代償。

その果てを知ったから。思い出したから、その力を受け取る事に、躊躇いが生まれる。

「それが正しい。君は、俺ではないのだから。」
そうだ。

違いは、沢山だ。

自分は正義の味方ではない。

心の底から、そう在りたいと思っっている訳でもない。
故に。

自分には、この力を——『エミヤ』という存在の力を扱う資格など、有りはしない。

「だが、こうして俺が君の前に現れたのは、きっと君にも、『可能性』があるからだろう。」

可能性。

正義の味方の可能性か。それとも、守護者としての可能性か。

そのどちらであったとしても、それは自分にとって決して良いものではなかった。

どちらにせよ、自滅は免れない。

「いつか、君は選ばなければならない。その時が来たら、また——」

世界が朧と化す。

意識が失せる。

「大丈夫ですか？」

声が聞こえた。

うつすらと、瞼を開く。

白い少女が、目に写った。

第一話 「悪魔の駒」

「大丈夫ですか？」

目を開けば、白い少女が此方を覗き込んでいた。

体に力が入りにくい。体を起こすことは、未だ出来そうにはない。

だが、何とか喋ることは出来そうだ。

「だい…じょうぶ…」

「いえ、大丈夫ではないですよ。」

片言ながら、大丈夫だと言ったが、しかし眼の前の少女は大丈夫ではないと、ぼつさり切り捨てる。

確かに。全くもってその通り、ぐうの音も出ない正論だ。

体に力が入らず、立つことはおろか喋ることも満足にすることは出来ず、放つ言葉は片言だ。

誰がどう見ても、これが大丈夫な状態などではないと判断する事が出来る。

改めて自分が重体であると理解させられるには、確かな事だった。

「立てますか？」

「たて…ない…」

「立つことも出来ないんですか…なら、運ばせてもらいます。」

そう言うと、少女は自分の首と膝の後ろに手を回し、軽々と持ち上げた。

所謂、お姫様抱っこ状態だ。

恥ずかしいというよりも、驚いた。これは純粹に、驚いた。

なんとという膂力だ。小学生程の体躯であるにも関わらず、高校生である筈の自分を、まるでそこの石を掴み取るように簡単に持ち上げるとは。

「すごい…な…」

「ありがとうございます。あと、私は小学生ではなく高校生です。」

こちらの心を見透かしたように、少女が答える。

これまた、驚いた。

小学生ではなく、まさか高校生とは。

いや、だとしてもこの膂力は異常だろう。本来、そこらの少女が持つような力では、断じてない。

このような力を一般人は持たない。

それこそ、プロレスラーやボクサーといった格闘家、もしくは拳術を極める武闘家といった者達が持つべき力だろう。

「家の場所は分かりますか？」

少女が、家の場所は分かるかと問い掛ける。

家。自分と家族が住んでいた場所。

ああ、有る。そして分かる。

この世界に生まれ落ちた時に、自分を懸命に育ててくれた大切な家族が居る場所が。

だが――

「おもい…だせない…」

その場所が何処に有るのか、思い出せない。

家が有るのは分かる。家族が居るのは分かる。

だが、家が何処に有るのかが、それがどうしても思い出せないのだ。

「記憶喪失…という訳では、ないのですよね？」

「ああ…自分のことも…家が有ることも…わかる…けど、何処に有るか、が…思い、出せない…」

理由は分かっている。

これも、力を行使した代償なのだろう。

かつて衛宮士郎が、使つてはいけない未来の自分の左腕を使ってしまった際に記憶が無くなってしまった時に似たようなものだ。

言うなれば、個別的記憶混乱。

記憶が一気に喪失する記憶喪失とは違い、衝撃やショックによって一部の記憶が混乱している、というものだ。

衛宮士郎のもの比べれば、随分と優しく軽い症状だ。

少し休む事が出来れば、何とかなる程度のものだろう。

「困りましたね…」

少女が顔を顰めながら考え込む。

自分の上司に伝えた方が良いのだろうか？ 初対面だが、悪い人には見えない。

しかし、そう簡単に気を許しても良いものだろうか…

「…降ろして、くれないか」

そう言えば、少女は思考を巡らすのを止めたのか、こちらへと顔を向けた。

「もう大丈夫なんですか？」

「ああ…もう、歩ける。」

少女に降ろしてもらい、足に力を込めて体を支える。

まだ体が痛む。だが、立つことが出来ない程のものじゃない。

少し震える膝を手で抑え、体全体にもっと力を込める。

これ以上、少女に迷惑を掛ける訳にはいかない。これは、自分の自業自得なのだから。

「此処まで、ありがとう。もう、大丈夫だ。」

「でも、家の場所、分からないんですよね？ どうするつもりなんですか？」

少女の正論が、胸に突き刺さる。

家の場所が分からないなら、もはやどうする事も出来ない。それはその通りだ。

だが、こつちも考え無しで大丈夫だと言った訳ではない。

「両親に、迎えに来てくれてって電話するよ。だから、大丈夫だ。」

ズボンのポケットからスマホを取り出し、未だ残る痛みに耐えながら、無理矢理に笑顔を形作る。

頭が痛い。体も痛い。正直、立つのもやっとの状態だ。

だが、そんな自分の体に鞭を打って、今は立っている。

「…そうですか。分かりました」

少女はそう言って、はあ…と溜息を吐いた。

そして、踵を返して離れていく――

訳では、なく。

「え――」

こちらに近付き、鞭打つ体の肩を持つてくれた。

「せめて近くの公園まで送ります。あそこにはベンチも有りますから。」

このまま倒られては後味が悪いので。

そう言いながら、少女は自分の肩を持つてくれる。

すっかりとした、優しい子だ。

なら、お言葉に甘えさせてもらおう。少しばかり、情けないような気もしなくはないが。

『架競天治。』

「はい？」

「俺の名前だ。出来れば、君の名前も教えて欲しい。命の恩人だからな。」

「命の恩人って言われる程の事はしていませんが：私は、小猫。塔城小猫です。」

「塔城さんか。改めて、助けに来てありがとうございます。」

「どういたしまして。」

□ □

『体は剣で出来ている。』

鋭い声の独白が、頭の中で響く。

雪が降り積もり、地面は真っ白で覆われている。

空は暗く、歯車は朽ち果てている。

地面には、既に幾多の剣が突き刺さっている。

『血潮は鉄で、心は硝子。』

前見た世界とは、どこか違う景色の世界。

雪が降っている事、空が暗いという事、そして――

突き刺さっている剣の全てが、墓標に見える事。

『幾度の戦場を越えて不敗。』

これは別の景色、別の心象。

衛宮士郎でありながら、衛宮士郎の枠から外れた男の固有結界。

『たった一度の敗北もなく、』

別次元――所謂、パラレルワールド。

衛宮切嗣と共に、ある一人の少女を拾った世界の衛宮士郎の力。

『たった一度の勝利もなし。』

全のために一を殺さんとする者達を妨げ、何度も何度も悪を成すと決意した偽善者。

その身を未来の自分に置き換えた、哀れな男の末路。

『遺子はまた独り』

たった一人の、血の繋がらない一人の妹の為に、正義の味方としての立場を投げ捨てた。

妹にとつての正義の味方、全員にとつての偽善の悪役。

『けれど、この生涯は未だ果てず』

皆にとつての正義の味方としての思想を投げ捨て、妹の為に全てを敵に回す事を決意した贗作者。

敵を増やし、そしてその度に自らの肉体を書き換えた。

『偽りの体は、』

すべては、たった一人の妹が為に。

『それでも、』

一人の為に、全てを敵とし悪を成す。

『剣で出来ていた。』

愚かで、しかし実に美しい、男の物語。

――

吹雪が、体を叩き付ける。

寒い。凍える。体が凍ってしまいそうだ。

だが、体を動かす事すらままならない。

「お前は、俺に似てるよ。」

青いパーカーを着た、赤銅の髪に白髪が混じった少年が、此方の方を向いて話しかけてくる。

「その力の在り方は、英霊エミヤよりも、俺の方が近い。俺みたいに、ただ力を貸されてるってだけだ。」

力を貸され、そしてその力に呑み込まれ。

体の在り方を改竄され、ただ英霊の力を使うだけの一般人は、その体を英霊エミヤのものへと置き換えられた。

自分も、それに近いものだった。

英霊エミヤに連なる力、その全てを貰い受け、しかし自分がエミヤでないが故に在り方に耐えられず、力を振るう事すらままならない。哀れで愚かで、馬鹿げた者だった。

「俺や、そして英霊エミヤも、辿り着く場所は同じだ。お前の在り方も、いつかはそうなってしまう。」

「…」

困ったような顔で、正義の味方は言う。

「選択は迫られる。どうやっても、これは変わらない。」

「…」

「その時は、自分で選ぶんだ。俺や英霊エミヤに縛られる事なく、お前が選ぶべきだと思った選択をするんだ。」

それが、お前の為になる。そして、お前が振るう力になる。

第二話 「投影開始」

「――！」
バツ、と勢い良く体を起こす。

既に日は落ち、星々が空に浮かび、澄み渡った青い空は暗闇の如き黒い空へと変わっている。

「どうやら、彼女――塔城小猫に、この公園のベンチに運ばれ、彼女が帰った後に眠ってしまったっていたようだ。」

やけに、体が軽い。

朝のようなズキズキとした頭痛も無く、体調は万全と言える程に回復している。

ベンチから地面に降り立ち、まだ冬の寒さが残った冷たい風が頬を撫でる。

ああ、良かった。これなら、何とかかなりそうだ。

そんな安堵と共に、ふう…と、小さく息を吐いた。

「なんだ、随分と珍しい『神滅具』を持つてるな。」

時間が止まった。

そんな、そんな酷い感覚に、陥った。

体が動かない。指一本すら、動かす事が出来ない。

息が喉の中で固まっているかのように、呼吸をする事が出来ない。

冷や汗が流れ、地面に落ちる。

どくん、どくん、と、ゆっくりだった筈の鼓動が次第に早くなっていく。

時限爆弾を抱えているかのような、そんな緊張が体を強張らせている。

「――あ、っ――」

「お？ 理解が早いな。俺の言葉を聞くだけで、自分が死ぬ事が分かるとは。楽で助かるぜ。」

足音が、近づく。

死が、歩いてくる。

——自分が死んでしまう姿が、脳裏に浮かぶ。

はあ、はあ、と呼吸が荒れる。理性の糸が、少しずつ千切れていく。死ぬのか？

何の答えを得られないまま、此処で無様に死んでしまうのか？

折角、剣に成らずに生きる事が出来たのに。

せつかく——彼女に、助けてもらったのに、それを仇で返

すように、死ぬのか？

「——だ」

「あ？」

「嫌だ——まだ、こんな所で。」

お前みたいなの、何処の誰かも分からない奴なんか——

——殺されて、たまるかっ！」

感情を込めて、声を荒げる。

停止した時間が動き出す。

動かなかった体が、自分の意志によって素早く前へと動き出す。

走れ、走れ……！ 兎に角、距離を取るんだっ！

前を踏み出した足に、込められる力の全てを込めて駆け始める。

逃げられるとは思うな。相手はきつと、この程度の距離なら一瞬で

詰めてくる。

「逃げれると思ってるのか？」

ソレは、既に眼前に回っていた。

ほら、この通りだ。相手は一瞬にして、僅かな時間をも無視して、逃

げ出した餌である自分に追い付く。

ブンッ！

鋭い爪を持った、黒い腕が我が身の心臓へと疾走する。

「がっ……——」

直視し、しかし直感で体を投げ捨てる。

爪が空を裂き、向かってきた寸の所で体を横に投げ捨てる事で、何

とか心臓への直撃を回避する。

だが、その代わりとして左腕が裂かれた。

痛みが走る。流血が地に落ちる。しかし、形振り構っていられない。

痛みに苛まれながらも、しかし必死に体に力を込めて倒れるのを耐え、相手の腹に蹴りを入れ込まんと足を上げる。

「当たるかよ。」

ザクツ——果物を切った時のような音が、嫌でも耳に入る。

「ぐあつっ………!!!」

相手に、足を切られた。

痛い。だが、動ける。血は流れているが、力が入る。

別に腱を切り裂かれた訳じゃない。なら、まだ何とか出来る筈だ。

死なない為に、必死に足掻け…!

「くっ…!」

よろけながらも、地に倒れぬように何とか踏ん張る。

意識が飛んでしまいそうな激痛が、腕と足を中心に駆け回る。

だが、あの時の頭痛に比べれば、大したものじゃない。

飛んでしまいそうな意識を力強く保ち、眼の前の敵を捕捉し、鋭く

睨み付ける。

意思を殺すな。まだ、死んじやいない。

生きなければならぬんだ。諦めるような心を、決して持つな。

「へえ？ イイ目じゃねえか。痛め付け甲斐があるなあ…」

「っ…趣味の悪い、野郎だ…尚更、」

お前みたいな奴に、殺されて堪るか。

「え」

どくんっ…と、心臓が大きく鼓動を発した瞬間。

ぱきん——

意識を繋ぎ止めていた鎖が、砕け散った。

何が、起こった。

いったい、なぜ、

——嵐が吹いた。

踏ん張っていた体を隅々まで切り刻もうとする、鋭い暴風が。思考が真っ白になり、視界が澄んでいく。

何が起こったのか、という重要な事を考える事すら出来ない程に、意識が収束されていた。

警戒、必死、抗動——様々な事に向けていた意識が、ある一つの事に収束される。

頭に一つのイメージが思い浮かぶ。

銃に、弾倉を込めるイメージだ。

予め決められた数、性能の弾丸が込められた弾倉を銃に入れ込み、弾を銃身へと込めるような。

そして、ある言葉が。

「……………投影、開始」

ぱきつ、と、何かが割れる。

頭に、体に、また繰り返されるように、あの鋭い激痛が雷の如く迸る。

だが、気にならない。気に留めようとも、意識がそれを許さない。

「ああ？ 何を」

言っている。と、続けようとした。

ザクツ、グサツ——

「……………は？」

ポタポタと、胸元から何かが溢れて地面に落ちていく。

自然と、視線が地面の方に、音の鳴る方に向いていく。

見えたのは、胸から突き出た三本の白鉄と、真っ赤に染まった自分の体だった。

「て…め…な…を…」

ぐしゃ、と、悪魔の体が地面に倒れ伏す。

流血が地面を赤く染め上げる。

敵は消えた。だが、それと同時に、

「」
青年は、意識を失った。

□ □

無限の剣製。アンリミテッド・ブレイドワークス。

英霊エミヤに連なる者、即ち衛宮士郎が扱う事の出来る、魔術の最奥『固有結界』。その一つ。

衛宮士郎が見た剣、槍のカテゴリに当てはまる武器をその世界に投影し、ストックする事が出来る：というよりは、剣や槍だけではなく、盾や弓、キビシスの袋といった様々なものを投影し、内包している。

よく勘違いされるのだが、無限の剣製は剣や刀といった武器のみしか投影出来ない訳ではない。あくまでも、白兵戦武器の投影が主というだけなのだ。

『無限の剣製』は実際の使い所が多かった訳ではないが、彼らが見る以前に使われていたシーンは多くある。剣を呼び出す、剣を射出する、剣を改造するなど幅広く。

英霊エミヤのストックは、千を越えていたとされている。

英霊エミヤが扱う投影には剣や槍のみならず、盾や弓といったものまで様々で、衛宮士郎と違って制限がない。いや、衛宮士郎に制限があるという訳ではないのだ。ただ、どのルートにおいても、衛宮士郎という少年は英霊エミヤよりも投影魔術の腕が優れていなかったというだけで、彼もまたトロイア戦争の英雄の盾を投影していた。

投影魔術という、衛宮士郎が扱う魔術の一つが至った極致であるとも言えるそれは、しかし使い勝手が良いか悪いかと問われれば悪いものだ。

そも、投影魔術自体も使い勝手が悪い。何せ、衛宮士郎や英霊エミヤが扱わなければ、投影魔術など効率が悪いだけの魔術なのだから。聖剣を投影出来ても、ランクが高い物であれば自滅の可能性すら有るデメリットが大きい魔術。

使用者である英霊エミヤですら、聖剣を完全に模倣する事は出来ずにいた。

それを力を借りただけの他人に扱いこなせるのかなぞ、分かりきった事なのだが。

しかし、青年も少しずつ歩み始めていた。

もしかすれば、彼が贗作の贗作から脱却する未来が有るのかもしれない。

ない。

妄言程の信頼しか、ない未来ではあるけれど。

「……………」

夜のような暗闇の中で、夢を見ていた。

ある青年の夢を。正義の味方の夢を。

他者の為に身を投げ打つ青年。

そんな自分に嫌気が差す青年。

自分の力で自分を殺した青年。

力が完成し大人になった青年。

夢を捨て、自らを腐らせた青年。

自ら名前を捨てた、無名の青年。

年若い、答えへと至った青年。

自分が手に入れた力、『英霊エミヤに連なる全ての力』が及ぼす影響だ。

サーヴァントと契約したマスターは、そのサーヴァントの生前の夢を見る事があると言う。

英霊エミヤと契約した遠坂凜は、英霊エミヤの報われず、救われずの哀しい夢を見た。

では、英霊エミヤに連なる全ての力を持った彼が見る夢とは何か。それ即ち——英霊エミヤに連なる英霊達の、その人物達の、果てしない凄惨なる生前の夢である。

「……………」

背負うものが違う？ ああ、全く以てその通りである。

何せ、無責任に、そして身勝手に、『英霊エミヤ』という全ての存在の力を一身に背負っているのだから。

無謀かつ蛮勇、蛮行かつ愚行。それが、どれほど無茶苦茶な事であるかなど、明白だった。

一人の人間の魂に、何十人も其他人の英雄の力が籠もるなど、魂が保たれる訳が無いのだから。

「ああ…？ つたく、何してやがんだ…」

景色が変わる。夢が変わる。

羽織を持った一人の青年が、呆れ顔でこちらの頭に拳を置いた。痛くは、なかった。

「憧憬を否定するつもりは無えがな、それで自分^{てめえ}が死んじまったら、そりゃ本末転倒ってヤツだぜ。」

だが、言葉は痛かった。

その優しい言葉が、何よりも心を抉った。

「自分から背負ったんなら、それを途中で捨てるなんざ許されねえんだぞ。目え向けて生きる覚悟の一つくらい決めとけ。」

「……」

「まあ、なんだ。儂はただの刀鍛冶、そんで年寄りだからな。出来る事なんざ少ねえだろうが、テメエの志の為に、力添えくらいはしてやるよ。」

笑いながら、青年は言う。

「鉄を打つのは、鍛冶師の仕事だからな。テメエも疲れはするだろうが、刀握るんだ。そんなくらいは我慢しろよな。」

過分を捨て、重さを捨て。疾さを捨ててテメエを知った。

真髓解明。完成理念、収束。鍛造技法、臨界。

其処に至るは数多の研鑽。

此処に至るは汎ゆるの収斂。

築きに築いた刀塚。

縁を切り、定めを切り、業を切り。我をも断たん都牟刈村正。

縁起を以て宿業を断つ。

八重垣造るは千子の刃。即ち、宿業からの解放也。

この一振り^で以て仕事を納め、いざ刮目せよ。

剣の鼓動、此処に有り。

此れこそ——都牟刈村正だ。

第三話 「歪な憧憬」

■ ■
体の全てが、痛い。

全身の皮膚が焼けている様な痛みが。

全身の骨が砕かれた様な激痛が。

全身に流れる血が沸騰している様な苦痛が。

魂を痛め付け、傷跡を残す程の激痛と苦痛。ただそれだけが全身を喰らっている。

力の行使、その代償。死んだ方がマシだと思える程の痛みが、力を使う度に襲い掛かる。

一度の投影が十回の死に匹敵するなど、過去に類を見ない出来損ないだと、自分を卑下する。

得た力に似合わぬ肉体、魂。つくづく、自分は力に目が眩んだ馬鹿野郎だと思いたくなる。

自業自得、因果応報。自滅も良い処だ、全く。だが、それでも。目を背く事は出来ない。そんな事、出来る訳がない。

自ら選んだ力だ。向き合わなくてはならない。

自ら選んだ死だ。進み続けなくてはならない。

例え、どのような障害があろうとも。

それが、星を喰らう大蜘蛛であったとしても。

それが、あらゆる力を吸収する最初で最後の龍種であったとしても。

永遠の象徴、円環の理の象徴である最強の龍種が相手であったとしても。

道を歩まない訳にはいかず、歩みを止める訳にはいかない。

故に——さっさと、目を醒まそう。

「っ…あ、ああ…」

巨石を持ち上げようとしているのではないか。そう思わずにはいられぬ程に重く、怠い暇。

開けようにも開けられず、口から出る声は凍った蛇口から微かに溢れる程度の水のように。

もはや言葉ではなく、喘ぎのようなものだった。

苦しみは消えず、それ故に発する声は痛々しく。

願いもせずに生まれ落ち、受ける事など願い下げの薄汚い呪いを受ける事になった、あの蛹のような気分だ。

「…」

呆気なく、脱力する。

駄目だ。全く駄目だ。瞼を開こうとする力すら碌に入らないとなると、体を動かす事など絶対に出来はしない。

そんな確信から至るのは、体を起こす事への諦めだ。目で景色を見る事すら叶わないなら、もうどうしようもない。

であれば、脱力する他無い。無理に力を込めても、もうどうにもならないのだから。

「起きてますか？」

がら、と扉が開く音と共に、聞き覚えのある声が聞こえた。

「…あ、」

声を出そうと喉を張る。だが、掠れた文字と吐息以外に何も出てこない。

「無理して喋らなくて大丈夫ですよ。貴方、三日も寝てましたから。」

座椅子に腰を降ろし、白髪の少女は——塔城小猫は、呆れ顔でため息を吐いた。

「もう安心だと思って帰ったのに、悪魔の気配を察知して来てみれば、また貴方が倒れてました。しかも死にかけてです。何をすれば、あんな死にかけになるんですか？」

彼女からの正論に、やはりぐうの音も出ない。

元から喋る事は出来ないのだが、例え喋る事が出来ていたとしても、きつと反論する事もなかっただろう。

それ程までに、彼女の言い分は正しかった。

彼女の愚痴は、零れて仕方のないものだったのだ。

「まあ…何にせよ、無事に生きていて良かったです。瀕死でしたけ

ど。」

申し訳無い気持ちばかりが募る。

おかしな事に、自分が生きている事に対する実感や安堵といったものは、全く感じなかった。

遂に自身への感性すら壊れたのだろうか。それとも、衛宮士郎の自分の命を擲つてでも他者を助けんとする自己犠牲の表れだろうか。

「あら。起きられたのですか?」

自分の事を考えていると、淑やかな声が聞こえた。

首を向ける事は出来ないし、目で見える事も叶わない。何せ、体に力を込めようと体は瞼すら動かせないのだから。

「目も開けられないし、言葉も発せませんが、起きてます。」

「そうですね。では、自己紹介をしておきますね。私は姫島朱乃と申します。此方の小猫ちゃんと共に、オカルト研究部に所属している者です。」

「えっと…教えて良いんですか?」

「ええ。リアスから許可は降ろされているわ。」

彼女達が何を話しているのか。今の自分には、全く見当がつかない。

ただ、波乱を呼びそうな予感はした。

□ □

その男は、腐っていた。

「正義の味方なぞ、くだらん理想に縋るか。だが、貴様はその類ではないんだろ?」

硝子細工に刻まれた罫。彼の体は、もはや崩壊寸前の硝子と何ら変わらなかつた。

理想を捨て、信念を捨て、ただ独りで数多を殺し尽くし、その果てに自分すらも殺した哀れな男。

達成は無く、勝利も無く。有るのは、ただの腐敗と敗走のみ。

「こんな力に憧れるなど…余程の馬鹿くらいものだ。貴様は、その馬鹿だ。」

男は嘲る。

男の力を持った青年を。そして、自分自身を嘲笑う。

血潮も心も、男には既に存在しない。もうずっと前から、枯れ果てているのだから。

「別の俺に成るのだろうか？ それで良い。こんな在り方なぞ、本来有ってはならないものだからな。」

男は己が如何なる者かを自覚している。

後悔は無い。だが、諦めている。自嘲している。

衛宮士郎という人間の別側面。理想に溺れたが故に破滅した、ある種の本来辿る筈だった未来。

他者の為なら自分をも投げ捨てるという偽善が辿り着く終着地点。

「自分が腐る様なぞ、見ていても無様なだけだからな。決して選ぶんじゃないぞ。」

ある種の優しさ。それは、暖かいもので。

腐った男から与えられた、ある意味での助言だった。

第四話 「悪魔の世界」

悪魔という存在に襲撃され、またも塔城さんに助けられて入院する事になってから、もう数週間という時間が経過していた。

自分の時間感覚も可怪しくなってしまうのかと考えもしたが、どうやらそんな事は無いらしい。

ただ単に、俺が眠っている時間が多かったというだけだった。何とも恥ずかしい限りだ。

まあ、それは兎も角として。

現在、俺は駒王学園と呼ばれる学園に在る部活動の一つ『オカルト研究部』の部室に訪れていた。

「改めて、架競天治くん。君の力について、説明してくれるかしら？」
オカルト研究部の部長「リアス・グレモリー」は、凜とした態度で俺へと問を投げる。

悪魔を殺した力。悪魔に対して、何処からともなく剣を「出現」させ、それを投擲するように俺は攻撃した…らしい。

正直言つて、俺にはそのような記憶など皆無だ。その時は、自分の意識なんて保つてもいられなかったのだから。

だが、その力がなんであるのかは前々から把握している。

生まれた時から…否、この世界に生まれ落ちる前から、俺はこの力を知っている。理解している。

それを知っていないながら、力の代償を予め理解していないながら、力に溺れて何度も死にかけた馬鹿な男である俺は、本人である衛宮士郎程ではないが、説明出来る。

「結論から述べておくと、これは貴方達が言う神器、もしくは神滅具には当てはまらない。」

この力は、『無限の剣製』は決して神器でも神滅具でもない。

俺から告げられたその言葉に、皆が目を見開く程度の驚きを見せた。

「…神器ではない、ね。なら、貴方のその力は一体何なのかしら？」
彼女の目に、警戒の意が顕になっている。

それは、自分達が知らない未知の力への恐怖か。それとも、俺個人に対する敵意の表れか。

どちらにせよ、それは仕方ない事だ。俺から言える事は何も無い。
「投影魔術。物体を目視し、構造を理解した物を、現物より劣った性能で…つまり、レプリカとして作製する力だ。」

投影魔術。魔術の中で、最も効率の悪い魔術とされている魔術。

“本物”を模倣したレプリカを作り出す魔術であるそれは、非常の効率が悪い魔術であり、しっかりと材料を揃えてレプリカを作った方が効率が良いとさえ言われている。

だが、衛宮士郎は——英霊エミヤは、その限りではない。

「俺が使う投影魔術は、剣というカテゴリに特化している。剣を投影するならば、殆どリスク無しでレプリカを作り出す事が出来る…が、俺はこの力を完全に扱えない。殆どリスク無しでレプリカを作り出せると言ったが、それは俺ではなく、俺が憧れた人の話だ。」

俺は、ただ力を魂に刻み込めただけの凡人だ。

決して、衛宮士郎のような精神性を持っているという訳でもない。彼のような、極端な自己犠牲精神の持ち主という訳ではないのだ。

他人の起源。他人の力。持っているモノは全て他人のモノ。決して、俺自身の力などではない。

上手く扱える訳も無い。代償無しで使える訳が無い。

偽物の偽物など、醜く悍ましいばかりだ。

「…なら、あの悪魔にしてみせた剣は、偶然という事かしら？」

「ああ。普段の俺なら、あんな事は出来なかった。…もし、信じられないのであれば、ここで証明するが。」

俺が力を扱えない事を。偽物の贗物である事を。

愚者に降り掛かる代償の雨。全身を蝕む炎の刑。

一度の投影で死に様を晒す事になるかもしれない破滅の技。聖剣を投影する訳でも聖槍を投影する訳でもなく、ただの投影で死にかけ
る為体。

「…なら、お願いするわ。貴方を信用するには、まだ足りないから。」
「分かった…煩くなるだろうが、どうか我慢してくれ。」

腰を降ろしていたソファから立ち上がり、少し身を下げて俺は片手を水平へと上げる。

「I am the bone of my sword」

我が身は剣に非ず。

是の身は、ただの鉄屑だ。血潮も心も、綻びばかりの硝子に過ぎず。得るのは欠陥ばかりの模造品。失うのはこの愚かな命。

力に目が眩み、憧憬に溺死した憐れな愚者の価値なき石ころ。

この体は、ただの鉄屑にしかなり得なかった。

「？」

激痛が、何時まで経っても走ってこなかった。

あの頭痛が、あの地獄のような苦痛が、どれだけ待っても全身に襲い掛かって来なかった。

体には何の痛みもなく。

ただ、掌に――

一本の白い雌剣が握られているだけだった。

第五話 「力の使い方」

『干将・莫耶』。それは、中国に言い伝えられる幻の雌雄一対の剣。雄剣を干将、雌剣を莫邪と呼ぶその剣は、その完成までの工程を逸話として残している宝剣であり、Fateにおいて英霊エミヤの殆どが必ず使用する代表的な武器だ。

英霊エミヤの元である衛宮士郎もまたこれを扱うのだが、彼が干将・莫耶を完璧に投影する事は容易ではなかった。

それは俺も同様だ。いや、違うな。正確には、同様ではないか。

俺の方が、彼よりも酷い有様になっていたのだから。俺の方が、彼よりも死にかけていたのだから。

何かを投影しようとする時点ではなく、投影魔術を使おうとした時点で俺は地獄の様な苦痛と激痛に苛まれていた。

贗物の贗物。ただ英霊エミヤの力を強引に焼き付けただけの俺が、簡単に扱える技術ではなかった。

その筈なのに――

「な――なん、で」

俺の右手には、本来有る筈の無い雌剣が握られていた。

何故、何故だ。

分からない、分からない、分からない。

全く以て、訳が分からない…！

「なんで…：…今まで、たった一度だって成功した事がなかったのに…：…!？」

つい、崩れ落ちてしまう。

信じられない。何故、こんな事が…：投影が成功するなんて、有り得ない事が起きた？

愕然としながら、投影した莫邪を眺めていると、

「大丈夫ですか？」

心配してくれる声が聞こえた。

はつとして、俯いていた顔を上げる。

其処には、此方を心配するような表情を浮かべている塔城さんが居た。

いや、彼女だけではない。その他の人達も、突然崩れ落ちた俺を心配してくれている。

「あ、ああ：大丈夫、大丈夫だ、塔城さん。ちよつと、いや、かなり：驚いてしまつて。」

「：嬉しくないんですか？」

「え？」

彼女の言葉に、体が固まつた。

「前から出来なかつた事が出来たのに：あまり、嬉しそうではないので。出来なかつた事が出来るのは、嬉しい事じゃないんですか？」

それは、本当に不思議だと思つたが故の疑問。質問だつたのだから。

しかし、俺にとっては酷く、すごく、複雑だつた。

投影を成功させる事が出来た。それは、確かに嬉しい事ではあつた。

だが、それ以上に。

（俺が：今更、扱つていい技術なのか：）

贋物の贋物である俺が、果たして今更：扱えるようになって良いのか。

まぐれの可能性だつてある。偶然の可能性なんて星の教程ある。

英霊エミヤは、拒絶する事はなかつた。

千子村正は、手助けしてやると言つてくれた。

衛宮士郎は、自分で選択するべき事が有ると教えてくれた。

だが——それでも。そうであつたとしても。

俺は、在り方から間違つている。衛宮士郎に、英霊エミヤに、相應しい人格を持っていない。

なのに：仮だとしても、この技術を扱えて良いのだろうか。

そんな考えが、どうやっても勝つてしまう。

歡喜よりも、罪悪感が勝つてしまう。

『くだらねえ。餓鬼が一々んな細けえコト気にしてんなよ。』

パンツ、と。背中を力強く叩かれたような気がした。

ふと振り返る。

今確かに…彼の声があった。彼が背中を叩いてくれた。

だが、後ろには誰も居ない。羽織を持った赤銅の青年の姿をした老人など、居ない。

だが…

「——ありがとう、村正さん。」

俺は、かの刀鍛冶に感謝を述べた。

□ □

「いきなりすまないね、しかもこんな夜中に呼び出してしまった。」

時間帯は夜。架宮天治は、木場裕斗に呼び出されて駒王学園のグラウンドに居た。

「いや、構わない。何となく、要件は分かる。俺の力についてだろう？」

夜に呼び出されたにも関わらず、しかし彼は不機嫌を表す事もなく。

最初から、自分が木場裕斗に呼び出される事を知っていたかのように冷静な態度だった。

「…ああ。君のその力——確か、『投影魔術』…だったよね。剣というカテゴリーの武器を投影するならば、リスク無しでレプリカを作る事が出来る。でも、それは君が憧れた人の話…合っているかな？」

「ああ、間違いない。」

「なら、一つ聞いても良いかな？」

「…なんだ。」

「君のその憧れた人は、聖剣エクスカリバーをも投影する事が出来るのかな」

エクスカリバー。

聖剣の中の聖剣、聖剣の代名詞。かの有名なアーサー王が持っていたとされる妖精の剣。

だが、それはあくまでもこの世界における話。彼が知るエクスカリ

バーは、そんな安い代物ではない。

約束された勝利の剣——星が造り出した神造兵装。

神造兵装とは——人の手によるものではなく、神と定義されるもの、もしくはそれに匹敵する存在によって造られた武装を指す。

その多くは神秘が色濃く残る時代においても非常に稀少かつ、絶大な力を持つとされている。

惑星の魂の置き場とされる星の内海にて結晶化し、星によって鍛えられた”最後の幻想”——それこそが、彼が知るエクスカリバーである。

それを含め、結論を言ってしまうば——

「お前達を知る贗物の聖剣であれば、無限に。俺と彼が知る究極の本物の聖剣一であれば、出来ない。」

この世界に存在する七本の聖剣であれば無限に投影する事が出来るが、神造兵装としての聖剣は絶対に投影出来ない。

彼は、そう答えた。

木場は、予想もしていなかった答えに目を見開いた。

「に——にせもの……？」

「ああ。贗物だ——七本に別けられた聖剣だったか？ 其々、破壊・擬態・天閃・夢幻・透明・祝福・支配に別けられたエクスカリバー……だが、究極の一に比べれば、それら全て贗物だよ。」

かつての大戦とやらで七つに折られた聖剣と、星の内海で造られ、鍛え上げられた最強の聖剣。

比べてしまえば、七本の聖剣など贗物も贗物、出来の悪い模造品も良いところだ。

「究極の、一——なら、僕は、僕達は……無意味に、殺されたのか……？」

手で顔を覆う木場。

彼は慰めるどころか何か言う事もなく、静かに背を向けた。

慰めてはならない。何か言ってはならない。

自分は聖剣計画という残酷非道な計画の被害者ではない。言ってしまうば、何の関係もないただの他人でしかない。

そんな自分が、果たして被害者である彼に何か言えるだろうか？
何か言える事などあるのだろうか？

否、否、否。言える事はない。発言する事など出来る訳がない。
ただの他人が、被害者でない無関係な人間が、当事者の凄惨たる過去に介入するなど無粋にも程がある。

故に、何もしない。何か出来る事があるとするれば、この場から去る事。ただそれだけだ。

「……待ってくれ」

呼び止められ、踏み出した一步が止まる。

「……なんだ。」

振り返らず、再び問い返す。

「どうして、君は聖剣について詳しく知っているんだ…？」

「……」

「君の口振りから察するに、君は聖剣計画についても知っているようだった……何処で、それを知った？」

顔を上げて、憎悪が籠もった目を彼の背に向ける木場。

彼は振り返らない。振り返らず、何の期待にもならない答えを返すだけ。

「……』』を知っているから。」

「——は？」

『『根源』を知っているから。生まれ落ちた時、ソレを観たから。俺が言えるのは、これだけだ。」

第六話 「覚悟と決意」

■ ■
黒色の雲は一つもなく、紫紺の空に浮かぶのは遙か彼方で眩く輝かしい光を放つ幾千の星々。

その下に群がる町々には、涼しい風が流れ、僅かにこの弱い体を震わせる。

時間は深夜。きっと誰も起きていないであろう、誰もが寝静まっているであろう時間帯に、架競天治は駒王町の端にある公園へと来ていた。

「……」

たった数日も経っていないにも関わらず、しかし俺は、この公園に来る事が、まるで十数年以来に故郷に帰って来た時の様にしか思えなかった。

だが、それも仕方がない事なのかもしれない。

そう思ってしまう程に、そう思い出せる程に、この公園での出来事は、壊れかけてきた俺の脳内に色濃く残る強烈なものだったのだから。

此処は俺が二度、死にかけた場所。そして、俺が初めて悪魔と呼ばれる存在を殺した、謂わば殺害現場だ。

無意識の内に使用したのだろう投影魔術で、俺は悪魔の体に幾つもの剣を射出し、突き刺し、殺害したのだ。俺自身、全く憶えてはいないが。

「…」

だが、殺害したのは事実だ。

この世界に転生して初めて、俺は此処で命を奪った。極悪非道な存在であろうと、この世界に生まれ落ちた生命を殺したのだ。

殺そうとしてきたのだから殺してもしょうがない、なんて言葉で自分を正当化しようなどとは思わない。だが、罪悪感を覚えているという訳ではない。

それにはきつと、無意識であったから、なんて理由は無いら。否、そもそも理由すら無いのかもしれない。

ただただ単純に、そのままの意味で——命を奪った事に、罪悪感を抱いていない。

命を奪ったという自覚はあるが、しかし命を奪ってしまったという罪悪感はない。

恐らく、敵と味方の区別が出来る様になったのだと、俺は思っている。

戦場。殺すか殺されるかの場所で、敵に情けを掛ける事はない。

英霊エミヤが、人類の守護者として数多の命を奪って、より多くの命を救っていた時の様に。

衛宮士郎が、英霊エミヤとしての定めを受け入れてしまった様に。現実主義になってしまった様に。

『誰かの為に、誰かを殺す』——そんな、区別の枠組みが、出来上がってしまったているのだろう。

敵ならば殺す。味方なら助ける。味方だった者が敵になろうと、味方を助ける為なら殺す。敵だった者であろうと、味方になったなら信用する。

どちらかと言えば、この思考はHeaven's feelにおける衛宮士郎に近いものかもしれない。

間桐桜という個人を助ける。多数の味方ではなく、たった一人の人間の味方をする。と決めた衛宮士郎。

だが——

「……なんて、自惚れだよな。」

否定する。自分の言葉で、自分の思考を拒絶する。

馬鹿を言うな。たかがその程度の事で、衛宮士郎や英霊エミヤに近付いたつもりか。青二才が。

抜かすな、架競天治。俺は偽物だ。贋物を偽った贋物、紛い物の紛い物だ。醜くて悍ましい男だ。

俺は借りただけだ。他人の力を勝手に借りただけだ。決して、本物に近付ける程の実力なんて持ってない。

区別の枠組み？ 何を馬鹿げた事を。数度死にかけたただけなのに、何を偉そうに語っている。

「……でも」

村正は、俺の背中を押してくれた。

一々そんな細かい事を気にするな、と背中を叩いてくれた。

「…俺がこうして悩んでいる事が、失礼に値するのか…」

『分かっているなら悩むんじゃないやねえよ。女子じゃなくて漢だろ、手前は。』

「え——」

声が出た。確かに、声が出た。

ゆっくりと、後ろを振り返る。

白い羽織が風に仰がれている。

赤銅の髪が、僅かに揺れている。

青年の姿をした刀鍛冶が——其処に立っている。

「むら……まさ……」

『霊体…だっけか？ まあ、手前にしか見えねえから安心しろ。』

「霊体…で、出来るものなのか？ それは…その、簡単に。」

『知るか。ただ、せつかく儂から言ってやったのに今もうじうじ悩んでいる手前に、今度は頭に拳骨叩き込んでやろうと思ったら出来たっただけだ。』

「げ、拳骨か……」

体が竦む。村正からの拳骨…想像しただけで激痛が走る様な感覚を覚えた。

『背中押して間もなく出てきたんだ。手前、まだ自信だの、資格だの言ってるんだろ。』

「……」

『じゃあ聞くがな。手前、この力を選んだ事を後悔してんのかよ？』

「…違う。そんな訳はない。そんな事は、断じてない…！ この力は、俺の憧れだ。大人になってからも、ずっとずっと憧れてきた…」

『なら、さっさと覚悟決めろ！ 手前が自分で選んだ憧れなら、思い切って振え！ じゃねえと、宝の持ち腐れだ。』

怒号が、胸に響く。激励が、心を叩く。

憧れからの言葉が、憧れている人からの言葉が——とても、嬉しい。

『そら、さっそくお客だ。儂に見せてみる、手前の決意を。』

□ □

「……トリース・オン
投影開始」

ドクンっ——と、心臓が大きく跳ね上がる。

だが、頭は割れていない。地獄の様な激痛と苦痛が、頭に走ってこない。

寧ろ、スツキリとしている。誰も住んでいない無人の部屋のように、頭の中がスツキリとしていて、余計なものが何一つとしてない。

イメージするのは、リロード。弾を込めた弾倉を入れ込み、銃身を引いて弾丸を銃口へとセットする様に。

回路を開き、魔力を走らせ、その脳裏に——自分が映すべき剣の形を読み込ませる。

雌雄一对の宝剣。英霊エミヤが最も愛用していた宝具。

干将・莫耶——英霊エミヤの愛剣とも言える雌雄一对の剣を象つた宝具。

右手に干将、左手に莫耶を握り締め、更に深く意識を投影へと潜らせる。

投影魔術が投影するのは、その武器のみならず。武器の所有者の技量すらも、英霊エミヤは投影していた。

「……っ！」

バチツ——と、体に稲妻の如き激痛が迸る。

やはり、まだ完璧ではない。村正に認められようと、やはり未熟な我が身では英霊エミヤの力を完璧には扱え切れない。

だが、そんな事はとつくの昔から理解している。力が上手く扱えない事など、予想していた。

贗物の贗物。贗作の贗作。たかが僅か力に慣れた程度で使いこなせると勘違いする程、愚かではない。甚だしくはない。

自分の力量は弁えている。自分がまだ、彼等には届かない事など

知っている。

だが——憧れている人の一人が、力を振るえと言ってくれたのだ。

「ああ————この程度の痛みで、弱音など吐けるかツツツ……!!!」

恥ずかしい姿など、弱々しい姿など、見せられる訳がない……！
激痛に抗いながら、自分の体の中身が書き換えられていくのを感じる。

技術の投影。自身の技量ではなく、その使い手の技量を投影し、己が物として振るう。

英霊エミヤの技量——クラスの相性を無視し、アルスター伝説の英雄であるクー・フリーンを相手取った彼の技術を、投影する。

後ろで、彼が見てくれている。村正が、見てくれている。

そして、俺の中でも——彼等が、見てくれている。

示さなければならぬ。自分が、貴方達の力をこれから振るうという事を。貴方達に憧れているという事を。

そして、それを——人の為に使うという事を。

「魔剣……？ いや、聖剣か……？ いや、違う。どちらでもない……？ なんだ……何なんだ、お前！」

悪魔が叫ぶ。お前はいつたい、何者なんだと。

「ただの——^{愚者}人間だよ」

雌雄一対の剣を握り締め、そう告げる。

憧憬の力を選び、自らを壊しかけ、己が分を弁えた男。

されど憧れを止めず、贋物の贋物である事を自覚しながらも、前に進む事を選んだ男。

それが——架競天治である。

第七話 「唯一つの試練」

■ ■
視線がぶつかる。

覚悟を示すという強い意思を持った目と、この男は何なんだという戸惑いと恐れを含んだ目が交差する。

雌雄一对の剣。それまで一度も見なかった事がない二振りの剣。

魔剣の様な気も感じなければ、聖剣の様な気も感じない異質の双剣。

「……………」
冷たい風が、公園を吹き抜ける。鎖の様な緊張が、その場を走る。悪魔は理解した。目の前に立つ男は、確実に自分を仕留める気だと。

雌雄一对の剣を以て、首を獲ろうとしてみると、確信する。

それは事実。今の架競天治に、躊躇などという感情は存在していない。

「……………」
先行は、天治が取った。

雌雄一对の剣を握り締め、目を開いて敵を捉え、獲物を狙う動物が如く真つ直ぐに駆け出した。

体が軽い。苦しさが無い。まるで、あらゆる柵から解放されたかの様な、そんな自由感を覚えながら、懐へと入り込む。

余計な事も思い浮かばない。ただ、目の前に立っている悪魔を殺す事だけが、考えついている。

ヒュツ——と。鋭い爪を持った悪魔の腕が、瞬速の域で喉元へと振るわれる。

喉を掻き切り、鮮血を零す恐ろしい凶器。自分を殺すかも知れない死神の鎌——だけれども。

今となつては、その瞬速の刃があまりにも鈍く見えていた。亀の様に、のろまだと感じていた。

彼の喉元に突き立てられる筈の爪は空を切り裂き、肉に突き刺さる事はなかった。

彼は悪魔の攻撃を躲し、一瞬にして悪魔の懐へと入り込み——

「…」

「がつ…?!?」

干将で悪魔の腹を斬り上げ、莫邪で悪魔の胸を切り裂く。悪魔の体は、まるで豆腐の様に呆気なく斬られた。

が

が

が

が

が、悪魔の全身を喰らい尽くす。

宝具。それはサーヴァントにとっての切り札であり、そのサーヴァントがサーヴァントたるある種の象徴。

サーヴァントが持つ武器は、その殆どが歴史に名を残す名器か伝説の武器であり、この干将・莫邪もまた、その例に漏れぬ双剣である。

雌雄一対の剣——干将・莫邪。魔除けの文句が刻まれた剣。揃えて装備する事によって対魔力と宝具のランクがアップすると言われている宝具。

宝具としてのランクは決して高い訳ではないが、しかし投影の際のコスパは良い上に非常に取り扱いやすい構造をしている為、英霊エミヤに連なる者の殆どが必ずと言って良い程に、この剣を愛用している。

原典の二振りは、破魔の剣としての側面を持っている。それ即ち、魔性への特攻効果を持つ事に他ならず、それが指す意味は——悪魔にとつての天敵であるという事。

英霊エミヤが投影しただけの干将・莫邪であったならば、そんな事は出来なかっただろう。投影した宝具のランクが下がってしまうという仕様上、それは仕方がない。

だが——この剣を共に投影したのは、本物の刀鍛冶。幾千もの剣を造り出し、無限の剣ではなく究極の一を手に入れる事が出来た、唯

一無二の男。

そんな彼が共に投影たのであるならば——少しとは言えど、破魔の効果程度ならば付与出来る。

ランクが高くないと言えども、それは宝具。歴史に名を残した宝剣だ。

そんな代物に、ただの悪魔が耐えられる訳もなく。

悪魔は、ただ無様に嘆き、哭き叫ぶ事しか出来なかった。

「……」

だが——止まらない。叫び声を聞いても、涙を見ても、架競天治は止まらない。

右手に持った干将を逆手に持ち替え、振り上げた腕を今度は悪魔の脳天へと振り下ろす。

振り下ろされた陽剣は悪魔の頭蓋を砕き、脳味噌の中心を捉えて深く突き刺さる。

もうその時点で、悪魔の命は枯れていた。朽ち果てていた。だが、天治は止まらなかった。

深々と突き刺った干将を手放し、左手に持った莫耶を心臓へと投げ突き刺し、空いた右手で拳を形作り、顔面へと重い一撃を叩き込んだ。

意思と命を失った悪魔は、まるで人形のように軽々と吹き飛ばされ——起き上がる事はなかった。

「かつ……た……た……？」

『上出来だ（まあ、流石に脳天に突き刺すとは思わなかったがな……）。ちゃんと経験も扱えるたあ、意外と扱い熟せてるじゃねえか。まだ完全じゃあねえがな。』

「むらまや……」

『良くやったよ。まあ、問題が無くなったって訳でもねえが……今の手前なら、多少の事は大丈夫の筈だ。』

もう守られるのは止めだ。憧れるだけなものな。今度は手前から儂等に近付け。』

その一言を受けると共に。

架競天治は——歡喜したまま、眠る様に倒れた。

第八話 「天から墜ちた者」

あれから、一ヶ月もの時間が経過した。

自分自身としては、あの経験は、まるで数週間前に起こった出来事のように鮮明に思えるけれど、もう一ヶ月だ。

時間が過ぎるのは早いものだな、と思うと同時に、平和な日々が続く事も無かったなとも感じる。

この力が有能である事をリアス・グレモリー一行に知られてしまったが故か、俺は彼女達の悪魔狩りに付き合う事となっていた。

「だが、決して嫌とは思わない。その狩りが、俺の憧れた未来への糧になるのかもしれない」

彼は、正義の味方になろうとした。

夢を継いで、一生懸命にその夢を為そうと努力していた。

自分を犠牲にしても、誰かを助けようとするその在り方に、俺は憧れた。

どんなに茨の道を行んでも、痛みを耐えて夢へと駆け出せるその精神に、俺は憧れた。

誰かの為に自分を費やす。自分を費やして誰かの為になる。

そんな歪な正義に、そんな傲慢な偽善に、その本人が嘲った。

けれど、それは間違つてなどいないと青年は言った。決して間違いないかじやないんだと、青年は断言した。

歪だが、とても美しいその夢を間違っているとは、青年は言わなかった。それを認めなかった。

そんな彼らを、その道を行んで手に入れた彼らの力を、俺は選んだ。何もしていない半端者が扱っていい力ではない。そんな事は承知だ。

だが——それを扱えないまま、野垂れ死にする事は彼らに失礼だ。

村正は俺の背中を押してくれた。なら、俺はそれに答えなければな

らない。

その為の糧に、はぐれ悪魔を狩るこの仕事になつてくれるかもしれない。

「——やると決めたんだけ、曲げる訳にはいかないだろ。」

『架競さん、敵が飛びました。狙えますか?』

「ああ。問題ない」

切り替えて、弓の弦へと剣を掛ける。

回路を開ける。溢れる魔力を目へと回し、遠くの獲物に向けて目を見張る。

視界が遠く、拓けて見える。粒にもならず見えなかった獲物が、鮮明に視界に映る。

弦を引く。ぎりぎりど、魔力を込めた諸刃の剣矢を、力強く。

そして、彼らの力である事を忘れない為に。

自惚れてしまわない様に、おまじないの言葉を独り言の様に呟く。

「I am the bone of my sword」

ひゅん、と。

空を翔ける鳥の様に軽やかに、その矢は真つ直ぐ空を走る。

悪魔の顔が、悪魔の最期が、この目に映る。

何が起きたのか。何が飛んできたのか。

自分がどうなってしまったのか、何も分からないまま——心臓に深々と突き刺さった剣の矢に触れていた。

剣が光る。流し込んだ魔力が、荒々しい波の様に迸る。

心臓から体全体へと流し込んだその魔力は、深々と刺さった剣を起点として——悪魔共々、爆発した。

『壊れた幻想』——ブローケン・ファンタズム。

それは、魔力の詰まった宝具を爆弾として相手にぶつけ、破裂させる技能。

『無限の剣製』を持つエミヤだからこそ得意とし、何度も何度も扱う事が出来る強力な技だ。

「……はあ」

緊張が解れ、安堵の息をつい洩らす。

何ら問題なく狩れた。投影した際の激痛も、だいぶ薄れて耐えられるものになってきた。

力が馴染んできたのかもしれない。だが、まだその段階だ。

彼らに恥じぬ様に、この力を使いこなせる様になるんだ。その程度では止まらない。

熱が冷めていくのが分かる。力んだ体が、少しずつ楽になっていく。

その瞬間、背後から降る鋼を見据えた。

「――！」

弓を消す。剣を呼び込む。

魔力を右腕だけに叩き込み、体を明後日の方へと向ける勢いを利用して剣を振るう。

鋼を弾く。

剣が壊れる。

まるで鴉を思わせる黒い翼を持った女性の姿が、俺の目の先には有った。

「あら。仕留めたと思ったのに」

「…」

「まるで、後ろに目でも付いているみたいだったわ。貴方、人間じゃないのかしら」

「……」

誰かは知らない。全く分からない。

だが、目の前に居る存在が敵である事だけは、すぐに理解した。

再び、剣を呼ぶ。陰陽一对の双剣を構えて、呼吸を整える。

放たれた槍は、おそらく彼女から造られたもの。

つまり、得物は無くなっていない。武器は失われていない。

そして、姿から察するならば、悪魔というよりは天使。おそらくは、墮天使の類だろう。

防戦に回ればこちらが不利。かと言って、相手をそうさせる程の技量を、こちらは未だ持ち合わせていない。

だが——だからといって、尻尾を巻いて逃げる訳にはいかない。

「――投影、開始」

稲妻に打たれたかのような痛みが、体を奔る。

回路が開く。魔力が迸る。

記憶が、体を変える。

その武器に宿った、戦いの記憶が肉体そのものを変化させる。

戦いの記憶、その投影。剣に宿った戦士の技術を我が肉体に投影する事で、高度な技量を一時的に得る事が出来る技術。

エミヤの記憶。幾度の戦場を経験してきた、霊長の守護者の役目を担い続けた英霊の記録。

英霊の力。

俺が憧れた人の——技量を振るう。

「――！」

コンクリートを蹴って、加速する。

驚愕する表情が微かに映る。

ただの人間が、ここまで速く為るとは考えなかったのだろう。

一気に彼我の距離を詰め、敵の懐へと入り込み、その腹へと剣を突き立てる。

「生意気な！」

「っ……！」

剣が空振る。

刃翼がはためく。

大きく振り上げられた断頭の剣。一切を無情に斬り捨てる墮天の翼は、死神の鎌に等しい。

腰を落とし、体を下げて何とか躲す。同時に、近くにあった脚の脛へと双剣で斬り込む。

鮮血が跳ぶ。敵の体勢が僅かに崩れる。

抗おうとする意思が顔に浮ぶ。だが、その抵抗も虚しく天使は呆気なく脱力する。

剣を逆手に、左脚を振り抜いて顔面へと蹴りを叩き込む。

後頭が地面に強打する。黒い頭が、ぐらりと揺らぐ。

動かぬ天使は、翼を折られた鳥も同然。
食われるか、踏まれるかを待つだけの肉塊。死を待つ憐れな子供。
誰も助ける事のない、そんな敵の首筋へ——
陽剣の鋒を、容赦なく突き立てた。